国立国語研究所学術情報リポジトリ

大学生における日本語論説文読解力と学術共通語彙理解度の関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 中央学院大学商学部・法学部・現代教養学部 公開日: 2024-12-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田島, ますみ, 松下, 達彦, 佐藤, 尚子, 橋本, 美香, 笹尾, 洋介 メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000439

〔論文〕

大学生における日本語論説文読解力と学術共通語彙理解度の関係

田島ますみ
松下達彦
佐藤尚子
橋本美香
笹尾洋介

〈目　次〉

1　はじめに
2　日本語の語彙力と読解力についての調査
3　語彙・読解テスト実施概要
4　結果
5　考察
6　まとめと今後の課題

1　はじめに

高等教育における日本語母語話者を対象とした日本語指導は，「文章表現」などの科目において主に書くことに焦点が当てられて進んできた．教科書・教材も開発・出版され，「文章表現」系の授業は学部教育における基礎科目として定着した段階と言える．また，授業のレポートや提出課題，あるいは就職活動時の書類作成へのサポートとして大学にライティング・センター等の施設が設置されてもきている．

書くことだけでなく話すことに関しても，ゼミでの口頭発表であったり，アクティブ・ラーニングの重視によりディスカッションやプレゼンテーションが積極的に取り入れられたりするなど，大学での学びにおいて，その鍛錬の機会は格段に確保されるようになった．書く，話すという産出技能については母語であっても高等教育のカリキュラムで十分に検討される対象となっている．

一方で，読むことの指導に関しては高等教育段階で検討されているとは言い難い．母語としての日本語読解力を高等教育で扱うべきだという意識は低いのが現状である．しかしながら，大学生が文章を書けない要因として活字を読んでいないこと，すなわちインプットの少なさがあることは既に指摘されているとおりである（佐藤，2011）．また，2000年に始まったOECD生徒の学習到達度調査（PISA）では，日本の生徒の国際的な順位が数学的・科学的リテラシーの2分野に比べて読解力の分野で低いことが目立っている（国立教育政策研究所，2019）．PISAは高校1年生を対象として実施されるが，特定の進学先を選ばなければ大学には誰でも入れるという時代において，読解力の低い高校生がそのまま大学生となる可能性は否定できないところである．日本語を母語とする大学生に日本語を読む指導をすることの必要性の有無は大学によって分かれるであろうが，読む力の育成が必要，あるいは有効な大学生は確実に存在すると考えられる．さらに，近年の高等教育機関に求

められているキャリア教育の視点からも，読解力は社会的コミュニケーション力の基礎として重要性が指摘されている（菊原，2022）．

外国語教育の場合，読解力向上に関してまず言われることは語彙知識の不足であり，読むことの指導において有効であろうと考えられるのは語彙知識を増やして理解語彙量を増やすことである．文法知識をある程度習得した段階では理解語彙量が伸びていかなければ読解力は伸びない．一方，母語であっても，近年の大学生に関しては語彙力の不足問題は頻繁に指摘されるところである（田島ほか，2022）．本研究では，日本語母語話者である大学生の読解力と語彙力の関係に焦点を当てる．文章の理解度と語彙の理解度がどの程度関係し，読むことの指導において語彙知識の強化がどの程度有効であるのかを考える資料を提供することを目的とする．

2　日本語の語彙力と読解力についての調査

日本語母語話者の語彙力と読解力についての研究では，読解力の低さを説明する要因として語彙力が挙げられているものが多い．前述したPISAの結果において読解力の低いことが衆目を集めたが，調査対象となった生徒への質問調査で，「分からない言葉が多かった」という項目に「まったくその通りだ」「その通りだ」と回答した割合がOECD平均よりも高かったことも報告されている（国立教育政策研究所，2019）．読解調査問題に関する質問項目は他に「自分には難しすぎる文章が多かった」「複数ページを読んでいるうちに，どこを読んでいるのかわからなくなった」があり，これらの項目でも「まったくその通りだ」「その通りだ」と回答した割合はOECD平均よりも高かった．さらに，これらの項目を「その通り」と肯定したグループは読解力の平均点が否定したグループよりも有意に低かったことも報告された．義務教育を修了した高校生であっても母語の文章に対して「分からない言葉が多い」，「自分には難しすぎる」と感じることのある層があり，彼らは実際に読解問題の点数も低いという結果であった．

規模は小さくなるが，澤口・瀬戸（2015）は高校の国語の授業実践を模索する試みにおいて，高校生の文章読解力を外国語としての日本語能力を測定するために開発された日本語能力試験の読解問題を利用して測り，調査を行っている．PISA 対象者と同じ高校１年生35名が調査対象者であった．分析の結果，高校生の読解のつまずきは読書量の低下，語彙力不足，意欲の３点にあることが示唆されたことを報告した．

高校生ではなく，義務教育段階での研究もある．田中（2010）は，2007年から2008年にかけて小学１年生から中学３年生の計5,944名に教研式全国標準読書力検査を用いて調査を行った．用いられた検査は調査時点より25年以上前のデータとの比較が可能であったため，その比較により児童生徒の読解力が実際に下がっているのかという問いに対して答えを出すという試みであった．結果は，小学校で読解力は下がっていないが，中学校，特に中学２年生以降，語彙力と文法力に有意な低下が見られ，読解力の低下の可能性があることを報告している．

さらに，小学生のみの調査としては猪原ほか（2013）が小学１年生から６年生まで全学年で実施し，全項目のデータが得られた774名の結果を分析したものがある．読書量，語彙力，文章理解力の関係に焦点を当て，主に読書の教育的効果を調査するための研究であるが，語彙力と読解力の相関係数も報告されている．１・２年生では $r=.79$ であり，３・４年生が .70，５・６年生が .66と強い相関が示されながら，学年が進むにつれて数値は下がっていくという結果だった．

大学生を対象とした調査としては，角（2010）の調査が挙げられる．日本語の語彙と読解の問題を中心とした学力調査票を作成し，大学１年生673名に対して実施した．語彙問題と読解問題の点数には相関があった（$r=.39$）ことのほか，読解では長い文章，要旨を求める問題の正答率が低くなることが報告されている．

これらより，語彙力と読解力には関連があり，語彙力の低い者は読解力も低い傾向があると言える．また，中学生における経年的な読解力の低下には

語彙力の低下が伴っていることも検証された．さらに，猪原ほか（2013）と角（2010）が示した語彙力と読解力の相関係数の結果を見ると，学年が上がっていくにつれ，二つの関係が弱まっていく傾向が認められる．低学年の読み物のほうが高学年の読み物よりも難易度が上がり，語彙の力だけでは読解できない要素が増えるという原因が考えられるであろう．

本研究では以上の知見を踏まえ，大学生の語彙力と読解力の関係について，特に学術共通語彙と論説文の読解に着目し，どの程度の相関があるのかを調査する．また，読解力低位層の語彙力の状況を把握し，大学での読解指導に参考となるデータを得ることを目指す．具体的には，学術共通語彙テストと，公務員試験で過去に出題された現代文の文章理解の問題を読解テストとして，大学生に実施し，その結果を分析した．以下にその詳細を説明する．

3　語彙・読解テスト実施概要

語彙テストとして使用したのは学術共通語彙テスト Version 2.2である．学術共通語彙とは，学術的専門分野に関わらず学術的なテキストにおいて「共通」して使用頻度が高い語彙である．専門分野のみで使用頻度が高くなる，あるいは専門分野でしか使用されないような専門語彙とは異なる．松下（2011）の選定による「日本語学術共通語彙リスト」からコーパス出現頻度を考慮してターゲット語75語が抽出され，テスト問題が作成されている（田島ほか，2018）．ターゲット語の語義を 3 選択肢で問う形式である．これまでに，一般語彙のテストよりも大学生の語彙理解度の個人差をより明確に示すことが報告されている（田島ほか，2018）．さらに，学術共通語彙は大学での学びにおいて前提となる語彙であって，大学生にとって基本であり重要な語彙となることも本研究で使用した理由である．

読解テストは，過去の公務員試験（大卒程度）で出題された文章理解の問題のうち，内容把握と要旨把握の問題を各 3 問，計 6 問選んで問題とした．

問題に使われている文章はどれも学術的な文章だが，専門的な知識がなくても読める論説文である．小説などの文芸作品の文章は含まれていない．各文章の長さは547～984字である．正答を５選択肢の中から選ぶ形式で，内容把握は出題文章に書かれている内容に合致している選択肢を選び，要旨把握は出題文章全体の要旨として適切な選択肢を選ぶ．公務員試験の問題は，各問題に使われている文章が長すぎず，１問が数分で解けると想定でき，ある程度の数の読解問題を１回のテストで課すことができる利点がある．また，文章は空欄が設けられたり下線が引かれたりといったテスト問題としての加工が一切ないものなので，実際の論説文の読解と同じような状態で読めることもこの問題を使う理由の一つである．

これら２種のテストを2018年４月に２大学の１年生を主な対象者として実施した．両大学とも１年次配当の日本語科目の授業内で実施し，A 大学では語彙・読解テストを同日，B 大学では別日にそれぞれのテストを行った．語彙・読解量テストとも紙媒体で問題を配付し，解答はマークシートに記入させた．テストの実施時間は語彙・読解テスト，各30分とした．研究への同意書が取れた１年生210名，２年生６名，４年生１名の計217名のテストスコアを本研究での分析対象とする．

4　結果

２種類のテスト結果の基本統計量を表１に示す．学術共通語彙テストの平均は満点のおよそ84％，読解テストの平均はおよそ65％の得点だった．読解テストの問題では，要旨把握の平均が内容把握の平均を若干下回っているが，有意な差ではなかった（$t(216)=1.47$，$p=.14$，$r=.10$）．

表１　テスト結果基本統計量

	語彙テスト	読解テスト	読解テスト 要旨把握	読解テスト 内容把握
満点	75	6	3	3
平均点	62.83	3.92	1.91	2.01
標準偏差	14.05	1.62	0.93	1.01
最高点	75	6	3	3
最低点	22	0	0	0

表２　語彙・読解テストの得点の相関

	語彙テスト	読解テスト （合計点）	読解テスト （要旨把握）	読解テスト （内容把握）
語彙テスト	1.00			
読解テスト （合計点）	.47**	1.00		
読解テスト （要旨把握）	.33**	.82**	1.00	
読解テスト （内容把握）	.45**	.85**	.40**	1.00

**：相関係数は1％水準で有意

表２は，学術共通語彙テストの得点，読解テスト合計点，読解テスト要旨把握問題得点，読解テスト内容把握問題得点の相関を示したものである．語彙テストと読解テスト合計点の相関係数は $r=.47$ で，語彙力と読解力に有意な相関があることが示唆された．読解テストの要旨把握問題の得点と語彙テストの得点の相関係数は $r=.33$，内容把握問題の得点と語彙テストの得点との相関係数は $r=.45$ で，これらにも有意な相関が認められた．

語彙テストと読解テストの結果の関係をさらに詳細に見るために，語彙テストの得点にしたがって四つのグループに分け，各グループの読解テスト得点状況を検討してみた．表３に各グループの結果を示す．

表３　語彙テスト成績グループ別読解テスト結果

	グループ番号	人数	平均	標準偏差	最小	最大
読解テスト合計	1	91	4.79	0.98	2	6
	2	66	3.83	1.69	0	6
	3	31	2.74	1.29	0	5
	4	29	2.66	1.78	0	6
	合計	217	3.92	1.62	0	6
読解テスト要旨把握問題	1	91	2.29	0.73	0	3
	2	66	1.95	0.92	0	3
	3	31	1.29	0.82	0	3
	4	29	1.28	1.00	0	3
	合計	217	1.91	0.93	0	3
読解テスト内容把握問題	1	91	2.51	0.66	1	3
	2	66	1.88	1.07	0	3
	3	31	1.45	0.96	0	3
	4	29	1.38	1.08	0	3
	合計	217	2.01	1.01	0	3

グループ１は，語彙テストで75点中の71点以上をとり，学術共通語彙はほぼ理解できていると考えられるグループで，読解テストの結果は合計点，要旨把握問題，内容把握問題，いずれも平均点は高く，正答率としては８割前後の成績が取れている．グループ２は語彙テストが61点以上から70点までの得点者とした．語彙テストで８割以上の正答率であった大学生たちで，このグループの読解テストの平均は合計点，要旨把握問題，内容把握問題，すべて正答率としては６割を超えた．グループ３は語彙テストが51点以上60点の得点者とした．彼らの読解テストの結果は正答率において４割台であった．グループ４は語彙テストの得点が50点以下の大学生たちで，読解テストの正答率はグループ３と同様の４割台であった．

この結果を，語彙テスト合計点，要旨把握問題得点，内容把握問題得点ごとに図示したものが図１から図３である．グループ１から４に行くにしたがって読解テストの平均点が下がる傾向が示されている．その中でグループ３

と 4 が似通った結果となっている.

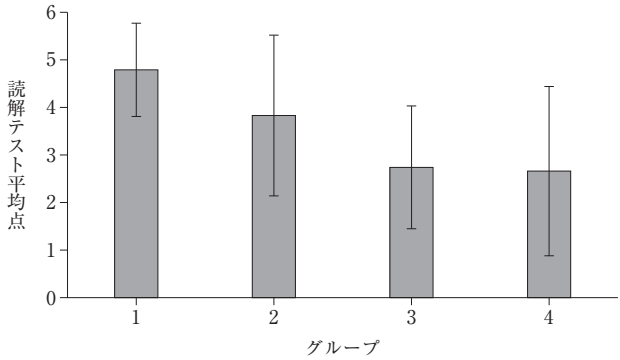

図 1　グループ別読解テスト合計点の平均点

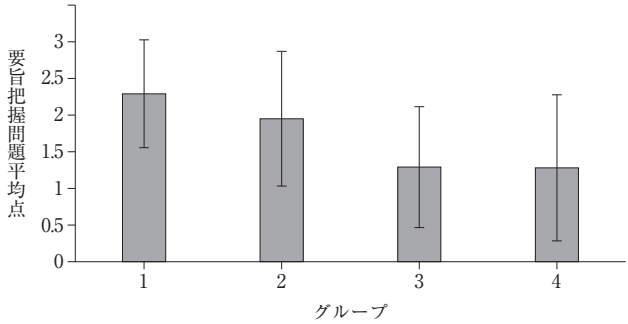

図 2　グループ別読解テスト要旨把握問題の平均点

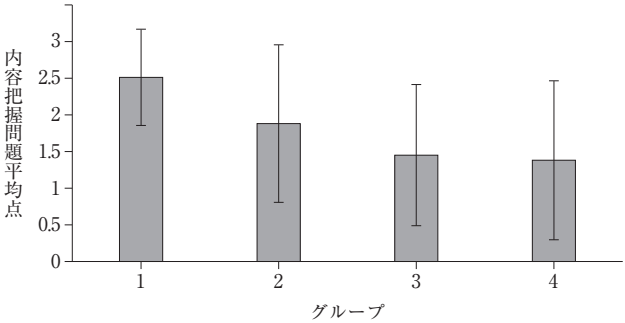

図３　グループ別読解テスト内容把握問題の平均点

５．考察

語彙テストと読解テストの点数の相関係数は r=.47で，猪原ほか（2013）の小学生調査の結果よりは小さく，角（2010）の大学生調査の結果に近い値であった．公務員試験に出題されるような論説文の読解では，小学生がそのレベルにおいて理解することを期待される文章の読解ほどには，語彙力の影響は大きくないことが改めて示唆された．語彙力以外の要素が読解において果たす役割が増すことが考えられる．日本語母語話者ではなく，外国語として学習する人を対象とした研究では，読解力の高い学習者は既有知識やストラテジーを積極的に活用することが指摘されている（舘岡，2000；中村・向井・近藤，2019）．このことから，大学生の論説文読解では既有知識や方略が使えるようなメタ認知能力が影響を与えることが考えられる．

では，大学生の論説文の読解において語彙力の影響は限定的であり，さほど意識しなくてもいいものなのだろうか．今回の結果で語彙テストの成績別に見た読解テストの結果は一つの示唆を与えるもののように思われる．図１～３が示すように，学術共通語彙テストで60点以下，すなわち８割以下の正答率だったグループ３と４は読解テストの正答率が50％を割り，非常に低く

なる．そして，グループ３と４の差は，グループ１と２，２と３ほど大きくなく，３と４の平均点は近似していると言える．学術共通語彙のおよそ８割の理解度という基準が適切かどうかは議論の余地があるが，語彙テストの点数がある基準点を下回った場合，著しく読解力が低くなる，閾値的な点数がある可能性はある．

つまり，学術共通語彙の理解がある一定量を超えなければ論説文の正確な読解はできないおそれがあるということである．学術共通語彙テストの60点は，テスト作問方法の論拠から頻度順位２万語に含まれる学術共通語彙の８割程度を理解していることを意味する．この目安を超えない大学生には語彙力を強化する指導やサポートを考えてもいいのではないだろうか．一方，この目安を超える大学生には語彙の指導やサポート効果は限定的であることが推測される．読解ストラテジーなど他の指導のほうが効果的であることが考えられる．

今回の結果でもう一つ注目すべき点は，読解テストの問題別の点数と語彙テストとの相関である．要旨把握の問題と語彙テストとの相関係数が $r=.33$ で，内容把握の問題との相関，$r=.45$ を下回った．文章全体の要旨の把握よりも，文章の部分的な内容の理解のほうが語彙力との相関があるという結果は論理的にも経験的にも首肯できるものである．部分的な内容の理解において語彙力の影響が大きいのに対し，全体として何を言いたいのかの理解に語彙力は同程度までは影響しないと言える．極端な例を挙げれば，語彙がすべて完全に理解できていても，文章全体のメッセージはとらえられない場合があるということになる．

今回の実施結果の平均に関し，要旨把握問題と内容把握問題で有意な差は出ていない．だが，要旨把握問題の得点が内容把握問題の平均点を若干下回っていることは事実である．角（2010）の調査でも要旨を求める問題が他の問題の得点より低いことは指摘されていた．また，李・山形（2019）の調査では，日本人大学生は包括的な読解ができていない傾向があり，文章の全体像がとらえきれず，その時に読んでいる語や表現といった当該情報のみに注

意を向けてしまって他の様々な情報との有機的な関連づけができていないことが指摘された．さらに，有元（2002）はPISAの結果を受けて，日本の高校生は，文章全体の論理構造と目的や主題を正確に理解させる問題であると正答率が低くなると述べている．逆に，文章の一部だけ読み取って解答する，全体の構造を理解しなくてもよい問題で正答率が高いと指摘した．

これらの先行研究はすべて，日本人の生徒・学生が文章全体で何を言いたいか，すなわち要旨の把握を苦手としていることを指摘している．本研究でも有意とは言えないが，そのような傾向は見られた．学術共通語彙の理解度が8割に達していない大学生に語彙力強化の有効性が示唆された一方，日本人の読解の弱点である要旨の把握に関し向上を図る方法を模索することは，大学における日本語指導において十分に意味のあることである可能性がある．

6　まとめと今後の課題

以上，大学生の日本語論説文の読解力と学術共通語彙の理解度に一定の相関が認められたのと同時に，読解力に対する語彙力以外の要素の影響も示唆された．学術共通語彙の理解度に関しては8割以上の理解度に達していない場合，論説文の読解力が著しく落ちることが示唆された．この8割という数値が閾値的な意味を持つのかどうかはさらなる検証が必要であるが，論説文の読解が一定程度できる，つまり基礎学力の面で大学での学びの準備態勢が整っていることを示す一種の指標のような役割が果たせる可能性はある．

学術共通語彙テストを簡易なプレイスメントテストとしてリメディアル教育やサポートが必要な大学生を特定するツールとして活用することも，読解力テストとの相関関係が示され，より確実な論拠をもってできることになった．今後学術共通語彙テストの得点データ，また得点者の読解力のデータが蓄積されていく中でさらなる検討を続けていく予定である．

また，大学生が文章全体の要旨を把握できないことは大きな問題である．

外国語学習において，表音文字で表記される外国語は文字を追って読めたり部分的にわかる箇所があったりしても文章全体の意味はわからないという状況があるが，語彙力の低い日本語母語話者の大学生が文章の要旨をとらえられないときはこれと似た状況になっているとも考えられる．文字で書かれた文章に担わされている書き手の要旨が伝わらなければ大学での学びは成り立たないのではないか．部分的な文章理解しかできない大学生が論理的思考力を鍛えると言っても限界がある．文章全体を理解する能力を上げる方策は今後検討すべき課題となるのではないだろうか．

本研究は，科学研究費補助金基盤研究（C）「大学生の日本語論説文読解における学術共通語彙の影響と読解困難点の解明」（課題番号：21K00630）の助成を受けたものである．

引用文献

有元秀文（2002）．「OECD 調査に見るわが国の高校生の読解力」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』103，pp. 118-121

猪原敬介・上田紋佳・塩谷京子・小山内秀和（2013）「日本人小学生児童における読書量・語彙力・読解力の関係（１）」『日本教育心理学会総会発表論文集』55，p. 143

菊原武史（2022）．「これからのキャリアデザインと大学生に求められる能力，大学の役割―教育哲学の視座でデータサイエンス・AI，日本語読解力に着目して―」『駒澤日本文化』16，pp. 71-92

国立教育政策研究所（2019）．「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）―2018年調査国際結果の要約―」
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/03_result.pdf（2023年５月30日参照）

李榮・山形純子（2019）．「大学生による日本語読解の困難点―筆記再生文の質的分析から―」『日本リメディアル教育学会第15回全国大会発表予稿集』pp. 96-97

松下達彦（2011）．日本語学術共通語彙リスト Ver. 1.01
http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html（2023年５月30日参照）

中村かおり・向井留美子・近藤裕子（2019）.「読解力の高い日本語学習者はエッセイの論理性をどのように再構築するか」『日本語教育方法研究会誌』26（1）, pp. 46-47
佐藤尚子（2011）.「大学での学びに必要な語彙力の養成」『リメディアル教育研究』6（1）, pp. 6-9
澤口真理・瀬戸美奈子（2015）.「高校生の文章読解における課題について―日本語能力の観点から―」『三重大学教育学部研究紀要』66, pp. 165-170
角知行（2010）.「大学新入生の日本語力―2009年度学力調査から―」『天理大学総合教育研究センター紀要』8, pp. 1-20
田島ますみ・松下達彦・佐藤尚子・橋本美香・笹尾洋介（2022）.「日本語学術共通語彙の理解度の評価―大学生と小中学生の学年別比較―」『リメディアル教育研究』16, pp. 145-159
田島ますみ・佐藤尚子・橋本美香・松下達彦・笹尾洋介（2018）.「日本語学術共通語彙テストの開発」『中央学院大学人間・自然論叢』45, pp. 19-31
田中耕司（2010）.「児童生徒の読解力は低下しているのか―標準読書力診断検査の結果分析を通して―」『国語科教育』67, pp. 19-26
舘岡洋子（2000）.「日本語学習者の読解過程と自問自答」『日本教育心理学会総会発表論文集』42, p. 166